

レオニーナ委員会 (Commissio Leonina) 委員長  
L. Bataillon 師とのインタビュー報告

宮本久雄

筆者は2003年9月パリでトマスの<sup>パレオグラフィ</sup>古文書学の世界的権威であるBataillon師と対談し、レオニーナ版の進捗状況や古文書学的手法やその営為を通して垣間見られるトマス精神についていささか得るところがあったので、それを御報告したい。

レオニーナ委員会設立やトマス研究は1879年のLeoXIIIの回勅「Aeterni Patris」を機縁としていることは周知の事実である。教皇の意図は、聖トマス神学の権威である公の全集出版にあり必ずしも科学的方法によるテキスト批判を考慮したものではなかったという。現在Commissio Leoninaは、パリ本部を中心に、カナダのオタワ、ポーランドのワルシャワ、米国の各ドミニコ会研究所におかれ、写本研究、テキスト批判、刊行準備などがなされている。

委員会の初期研究は、写本の分類整理やピアーナ版の修正などに留まり、方法論的にも非学問的であった。後者について言えば、議長がピアーナ版を読みあげ、各委員が写本を手にとりに基づいて修正するという方式がとられた。また13世紀の大学の古写本は参照されなかったという。こうした初歩的研究が飛躍的に進展したのは、トマスの自筆原稿『対異教徒大全』のテキスト批判・解説を介してであった。原稿に窺えるように、トマスはかなり早いスピードで書き訂正や省略を加えているので、その正書法(orthographie)は実に読み難い。この解説に英国人Mackey師は40年を費やした。トマスの自筆原稿にはこの他に、*Super III Sententiarum*, *Super libros Boetii De Trinitate*, *Expositio super Isaiam ad litteram* そして *Super IV Sententiarum* の小断片が残されている。筆者が殊に興味をもった点は、トマスによる大アルベルトゥスの講義ノートである。そこには不可解なメモやノートが記されているが、大アルベルトゥスの“Prima Philosophia”という語表現が“Metaphysica”と言いか

えられたりしている。書記による写本群では、「トマスが言ったように」と記されており、トマスの口述筆記は読み易いという。こうしたトマスの原稿解読を契機に写本研究は進展したが、その途上にさらに難題も生じた。例えば、15～16世紀のフマニストたちは、トマスのラテン語文体を一層文学的に整備しようと書き変えた。トマスの“*democratia*”を“*status popularis*”へ変え、あるいは彼の“*sicut Petrus*”を“*sicut dicit Beatus Petrus*”へ書き変えたという具合に。従ってこれらフマニスト写本はかなりのテキスト批判を要請する。別の例をあげよう。パリ大学などが保持している写本は古いものだが、やはり細心のテキスト批判が必要とされる。というのも、大学とドミニコ会では筆写方法が異なったからである。

大学ではある写本草稿Xをばらばらに分け(X<sub>1</sub>, X<sub>2</sub>, X<sub>3</sub>, …という風に)、筆者のAにはX<sub>1</sub>, BにはX<sub>2</sub>, CにはX<sub>3</sub>という具合に渡す。そのばらされた写本の筆写部分が回収されまとめられると、不正確で一貫しない写本X<sub>n</sub>が提出される恐れがあり、この大学的方法の結果として実際にオックスフォード大学では、『神学大全』第1部に5つの異なる写本が残っているという。これに対してドミニコ会では、写本XをまずAに全部写させ、続いて順にB, C, D各人に筆写させる。その間にもAの作製したA写本はEが、B写本はFがという風に筆写する方法をとり、この方法が比較的確実であるという。

以上のような写本研究の転換やプロセスを経てかなりのテキストが校訂された。今日ではその既刊本と準備中の書に関する目録が作製されている。全体の刊行には、あと半世紀かかるだろうという。

Bataillon 師は彼のグループと共に半世紀以上も地道で気の遠くなるような写本研究や校訂作業に服しているが、その研究中にトマスに対する新しい洞察を得たり驚嘆の念を禁じえないことが多々あったという。その点に関してトマス神学や哲学の展開史上特筆すべきことを紹介したい。第一にギリシア教父および初期公会議の文書がトマスに与えた影響である。周知のように彼の *Catena Aurea* (『黄金の鎖』) は、今日「鎖状写本」として残っており、それは四福音の各々に教父たちの注解をとり集めた著作である。例えば *Catena Aurea* 中のルカ写本をとりあげてみよう。写本中央にはルカ福音書本文が、そしてその左右にはギリシア教父を中心としたルカ注解や講話が行節に対応して集成されている。ルカの場合は、左欄にバシレイオスやニュッサのグレゴリオスの名前と引用が散見され、本文の右欄にはヒエロニムス、クリュソスト

モス、アウグスティヌス、ピザンツ司教テオフィラクトゥスそしてペーダの引用があり、殊にペーダが多い。これに対しマルコではペーダの引用が少なく、カロリング朝の神学者レーミギウスなどが引用されている。ヨハネではオリゲネスの引用が圧倒的に多い。擬ディオニュシオスの引用がないのは、トマスがその『神名論』を注解したからだろうと思われる。

トマスは *Catena Aurea* 以降もギリシア教父に注目し続け、またこれとは別にイタリア北部（ミラノなど）でギリシア人が所持していた、完全にラテン訳された初期公会議（カルケドンやコンスタンティノーブル公会議）の文書を参照した。それまでは重要な東方キリスト教公会議の文書は断片的な訳や抄訳を通してしか西方ラテン教会に紹介されていなかったという。このようにして *Super IV Sententiarum* とアリストテレス哲学の注解書から『神学大全』のキリスト論に至るトマスの思索の展開の間に、上述の *Catena Aurea* や東方の初期公会議文書が決定的転換の影響を与えたことが知られるわけである。従って日本中世哲学会がギリシア教父をテーマとしたシンポジウムや発表を推進してきたことは、トマス研究の深化のため喜ばしく必要な歴史であった。

次には Bataillon 師自身長年つちかってきたトマス観を御報告したい。師は現在トマスが大学で行った説教 (sermones) の写本研究やテキスト批判にたずさわっている。トマス教授の説教は朝・夕なされたもので、学生がノートした写本では短かいものになっているが、実際は長い説教だったと思われる。学生に向けられた勉学方法に関する説教には、彼の精神が窺える。すなわち、1つの専門に習熟した後には、多数の学者から学ぶべきである、と。例えば、アレゴリー解釈はアンブロシウスから、教義神学はアウグスティヌスから、典礼は大グレゴリオスからという風に。トマス自らも1人の師匠ではなく、多くの学者を批判的に研究し学んでいる。トマスの初期から晩期に至る思想的展開と飛躍はそのような精神でなされた。従って彼の愛智は、*Philosophia perennis* ではなく、この永遠的な自己革新的持続にあるという。Bataillon 師はさらにトマスの肉筆に対面してきた体験から感想を述べた。トマスの場合、誤りを消したり書き直したりする苦闘の足跡から彼の息づかいが聞こえるようであり、また欄外に修正や加筆のノートが記憶用に記されている点からもやはり十分準備して立論していることが窺え、また祈りの言葉の記入を目にするにつけ実にトマスとの生々とした人格関係に入ることができるのだ、と。

最後に以上の主旨とは違うが、別の耳よりのニュースもお知らせしたい。それは M. エックハルトがトマスの *Sententia* につけた注釈本が確実に残されているとのこと。その写本はまだ発見されていないが、こうしたニュースも写本研究者の心をときめかせるのである。

---

## マイスター・エックハルト国際学会報告

長 町 裕 司

1303年の聖霊降臨祭に開催されたドミニコ会総会の決定により、従来まで一つであったドイツ（テウトニア）全管区は北のサクソニアと南テウトニア管区に分割され、そのサクソニア（ザクセン）管区の初代管区長（Prior und Privinzial）の任命を受けたエックハルトは、パリ大学神学教授（1302年～）の活動から Erfurt にあるドミニコ会修道院に帰還する。今回の国際集会は、彼が1311年ドミニコ会総長から派遣を受けて再びパリ大学神学教授活動（～1313）に赴くまでのこの（第二次）Erfurt 時代を焦点とし、その全貌を ①霊性－教会－修道会史的観点 ②（エアフルト時代に属するものから収集された）説教集“Paradisus anime intelligentis”を中心とするその他一連の〈神の誕生説教 Gottesgeburtzyklus〉等のドイツ語説教における思想動向と表現形式 ③組織的三部作“Opus tripartitum”序文の構想とその思考スタイル ④ドミニコ会の霊性資料としての意義も有する“Die Rede der Unterscheidung（教導講話）”を巡って等、今日第一級のエックハルト研究者の諸成果を結集して学問的に再構成することを企図したものであった。参加者はドイツ－オーストリアから多数の他、イタリア、フランス、オランダ、アメリカ合衆国、南アメリカから数名、そして日本からの（私を含め）3名であった。Erfurt 大聖堂の最上階にある素晴らしい見晴らしと伝統の重みを持つカトリック神学部の Coelicum にて3日間にわたって極めて集中した研究発表と啓発的で豊かなディスカッションが行われ、休息時にも様々な形で交流をいただいたことも含め、我々の時代に生きるカトリック信仰と思索